

詩時評

第15回

言語生活は 比喩のおかげで

松本衆司

詩は極論すれば比喩の芸術である。比喩とは、ある事物・事象を他に例え、その類似性を具体的に示すことよって表現を有効にする修辭法である。直喩法(明喩) Simile「まるで〜のようだ」、隱喩法(暗喩) Metaphor 比喩を語句の中に隠しこめる。代喩法、直接その名称を呼ばず、共通点を有する他のものをこれに代えていう技法。諷喩法 Allegory(寓言法)。活喩法・人喩法 Personification、いわゆる擬人法。声喩法 Onomatopoeia、いわゆる擬声語・擬態語。私たちの言語生活は比喩のおかげで、なかなか楽しい。

平居謙第七詩集『燃える樹々』(人間社草原詩社)を読む。「冬の動物園」を引く。

動物園にゆこう／動物園に行ったら／犀を見るんだ／犀はいつも寝ころんで笑っている／寝ころびすぎて／砂で汚れている／呑気な背中に鳥が止まっている／最寄りの駅を下りて／高架線を／角度で見上げると／冬のおひさまが空に浮かんでいた／飛行機が突っ込んでゆく／芝生の上では恋人たちが／この上もなく幸せそうな様子で／お弁当を広げては／何か喋りあっている／柵の前に来ると／犀の計報が張られていた／何かの動物が／ぶるると震えて啼くのが聞こえた

この詩人の詩はほとんど初期の頃から読んでいる。その三十年を超える隔たりの間に詩はゆるぎなく彼の個性を湛えつつ否応なく人生を受け止めて、見事な詩へと変容している。

「たきこなみ詩集『そして溶暗』(思潮社)を読む。「たとえば ひとひらの印画」の最終部を引く。

女という女が母親になるほかない時代だったが／父と出会わなければ／そしてわたしたちを生まなければあり得た別の人生を／思ってみたことはなかっただろうか／とうとう聞けなかった 思い出は密封されて／意識はもう闇も澁みもなくその場その場

素通しだ／昏睡の潮目をさ迷いながら呼ばば薄く目をあけて鎮く／／そのとき 声か風となつて／たとえば ひとひらの印画は／ちぎれ残った帆のようにゆらめくのだろうか／流れる薄雲 はぐれた海鳥の影のように意識をかすめて／そのとき 最後の念も／薄紙の葉のように はらりと風に舞って行方を絶つのか

時代に装われて人々は生きる。いずれにしてもその個性のありかとしての一生である。その母の一生に寄り添う佳作群である。

川上明日夫詩集『無人駅』(思潮社)を読む。「つるんと卵の雨」の前半を引く。

つるんと 雨 降ってます／つるんと／ひとりでも 降っているのです／それだけでも 悲しいのです／言いわけをしない／人生も降っています／卵のようにただの眺めですから／晴れてゆく思いは／脱いでゆく想いのように／雲の殻のようなあのほとり／掴みどころがなくて恥ずかしいのです／鳥が空の嘴で／つついては割ってしまうのですよ／たまに／呼霊のように／むこう岸／雲間からあの人か顔をだすのは／そんな時です

現代の饒舌を過ぎて、静謐と向かい合う。
そんなひと時に私たちは心の瀬戸際を見詰め、
「人生も降っています」と、実感する。

林嗣夫詩集『洗面器』（土曜美術社）を読む。
「ひぐらし」を引く。

ふたり並んで 小道を歩いた／生きていこ
うと／花の名を教えあつた／道の駅から
海を眺めた／生きていこうと／風の香りを
確かめあつた／ふたり並んで 夏が過ぎ
ていく／かなかなかなと／ひぐらしが鳴い
ている／告げ合つたことばの こだまのよ
うに

さて、どの詩を選ぼうか。どの詩も真実と
確かに対話した味わいに満ちている。林嗣夫
は詩人としての立ち位置が見事なのだ。

愛敬浩一詩集『赤城のすそ野で、相沢忠洋
はそれを発見する』（詩的現代叢書）を読む。
10冒頭を引く。

考えもしなかったから／驚くのだし／ある
べきものがないので／混乱し／疑念が始ま
り／「事件」は生まれる／／相沢は『岩
宿』の発見』で書く。／「赤土の崖の謎は、
うかつに話し合える人もなく、ただ私ひと

りの追究となり、ひたすらに縄文早期の文
化を追って、解明に努力していくよりしか
たなかったのである。』／二つの「事件」
の後で、残念ながら、相沢さんは右のよう
に結論付けたのだ。

ひとりの人生を追うことで抜き差しならな
い人間のエゴや本能、醜悪な現実に向き合わ
なければならぬ。現代詩は独特の文体でそ
の真実を抉り出す。

根来眞知子詩集『雨を見ている』（滯標）
を読む。「空蟬」を引く。

庭の木の枝先に／空蟬ががっしりくつつい
ている／その光る目は最後に見ただろう／
地面に残つた穴／奥で過ぎた七年という時
間／やつと抜け出たその間／／ざっくり割
れた背中から／命が無事に羽化したとき願
つたこと／飛び回れ／オスなら鳴け／メス
なら卵を産め／命尽きて地に落ちれば／蟻
に引かれてまた闇のなか／急ぎ鳴け／急ぎ
産め／／日が昇って暑くなり始めた庭に／
蟬の合唱は始まりかましい／／おりしも
お盆の日々／里帰りの親子らしいのが／
長い網を持ってやってくる

冒頭で比喻について触れた。一言一句が尊

い真実と感じるのは、その言葉が秘めた比喩
の力によって、命を貫く意味を持つからだ。
全篇、その言葉の確かさに魅かれる。

安水稔和詩集『辿る 続地名抄』（編集工
房ノア）を読む。詩集としては二十五作目と
なる。「水金 みずかね」を引く。

町はずれの／小さな橋の上に立つ。／急傾
斜の川底を流れてきた水は／橋をくぐって
海に注ぐ。／／海に日が／傾いている。／
目の下から水平線まで扇状に／海は広がり
輝やく。／／小さな川の／小さな橋の上。
／いつでもない時間／どこでもない空間。
／／まぶしく目を細めると／ふと通りかか
る人影。／それは十一の娘くににまちがい
なく／声をかけようとして。／／どうしたこ
とか／声が出ないわたしの横を／娘くには
通りすぎる／／何度もうりかえし通りすぎる。

吟遊詩人のごとく、或いは、人々の暮らし
を撮り続ける写真家の眼差しのごとく、土地
土地を歩き続ける人として、その社会、時代、
歴史から一篇の詩を、生きる時間の在るべき
姿、せつなさの形を写し取る。安水稔和の仕
事である。

鷹森由香詩集『傍らの人』（ふらんす堂）

を読む。「熟柿」を引く。

いつのまにか／とろとろに 透きとおって
／ねっとり／あまく息づいている／夏の
激しさも／色づく枝や木枯らしさえも／手
のどかない／とおい過去／わびしい陽光
のもと／照柿色につやめいた短い日々／
はりつめた／うす皮に／ついい爪をたてると
／どろり／流れ出て／もう決してどれな
い

涌きあがる思いはそれぞれの個人のものだ。
生きるつれづれに、思いはさまざまに交差す
る。それをどう世界化するかが詩人の尊い仕
事である。その結実として、簡潔な詩語で描
く詩の奥行きに驚く。

根津真介詩集『何処までも』（土曜美術社）
を読む。「葉」を引く。

何時でもこの場所に帰ってこられるように
と／昔 葉をはさんだページがある／何度
でも読み返せるようにと／頁の角を折った
こともある／一度も振り返らなかつた曲
がり角／何周しても追いつけなかつた九十九
折り／いつの間にか葉は抜け落ちて／大
事な箇所はわからなくなつてしまつた／赤
ペンで印でもしておけばよかつたものを／

／買つてきた古本に葉が挟まれている／元
の持ち主の読み進めてきた最後のページ／
今日はここまでにしよと区切つて 眠つ
たか／もつと読みたいとがんばつたが 力
尽きたか／／ここからやり直そうと思つた
着地点／ここからやり直せると思つた折り
返し点／目論見が外れて飛び出せなかつた
終着点／周回遅れのほくを抜き去つていく
「愚」の葉よ

この詩と同様、詩集には経験と等身大の詩
が並ぶ。その思いや行いに読者はきつとそれ
ぞれの「葉」を挟もうとするのではないか。
あるがままの人生経験が詩の源泉でもある。

宮せつ湖詩集『雨が降りそう』（ふらんす
堂）を読む。「花枇杷のかたわらに」を引く。

川べりの水をながめながら／冬のあいだじ
ゆう／黙して咲いている／花枇杷／どうし
てだろう／人は目もくれず行き過ぎて／着
ぶくれの犬も遠ざかる／／いくらか暗い花
のしるさにひかれ／ほよつと人を待つよう
な／花の匂いにひかれ／わたしはそのかた
わらに／立つ いつまでも／立つ／花枇
杷になれたら いいつの／／こうして咲き
つづけてさえいれば／すがやかな儀式をす
るために／いつか蜜蜂がきてくれる／そう

すれば／初夏のひかりのなかに／たくさん
の枇杷の実を／ふくらますことができるの
だ／たつぷりの甘さを湛えて／／冬鳥がよ
ぎる／雨がふつてきた

ぶつ切れの現実の中で、慌しく時を過ごし、
自堕落に、或いは、無聊に押しつぶされ、と
いうふうには、生きることは自分を失うこと
でもある。宮せつ湖は、そこから自分を救い出
し、一つひとつのことに思いを寄せて、対話
をしようとする。それが尊い。この詩集はそ
の成果だ。

草野理恵子詩集『世界の終わりの日』（モ
ノクローム・プロジェクト）を読む。「朝顔」
を引く。

初めて乳首に服が当たつて痛かつた頃／真
つ白な朝顔を見た／頬を染めて朝顔が行水
をしていた／真つ白だった朝顔が手拭いを
使う度／青い筋が身体に入り／染められて
いる／手拭いを胸にこちらに向いた顔が／
母に似ていると思つた／／私は家族以外の
人に会つたことがなかつた／私たちは一本
の蔓につながりどこへも行けず生きていた
／空に雷光が走つた日／はじめてドアをた
たく者がいた／訪問者は泣いていた／私た
ちは固く抱き合い一緒に泣いた／青い墨の

ような涙を流せば流すほど／身体は濃く青く澄み切っていった／訪問者は疲れているように見えた／身体をいつも揺らし溺死者の目をしていた／「自然に物事は進んでいく」と言った／私はうなずいた／自然の意味が分からないままに／静かな夏の日／泣きつかれた訪問者が死んだ／花壇の中に横たえた時／カスミ草が訪問者の顎を触った／無精ひげに絡まった花びらが何枚か落ちた／雨の日だった／黒く柔らかい土に雨は小さい穴を作った／私たちもあつたという間に汚れていった／死ぬ日にはびつたりだった／訪問者はなぜ来たのだろうか／訪問者は私たちに何をしたのだろうか／考える度 乳首が服に当たり痛かった／でも答えはわからなかった／最後の花卉が落ちため息のような音が鳴り／私は自分の身体を初めて見た／あの行水をしていた朝顔に似ていた／風が吹くと冷たく 夏が終わると思った

現実には幻想が混ざり、鮮やかな描写が読者を不思議な世界に誘う。青と白のコントラストが目眩しい夏の終わり、空に雷光の走る雨の日の風景に「乳首」が重なる。独特の感性が導く世界に魅かれる。

『コールサック』九九号のページを繰る。

鈴木比佐雄の編集後記の末尾に「九十九号の校正紙を読んでいると、一九八七年晩秋に創刊号を出そうとしていた頃を想起した。創刊号に執筆してくれた鳴海英吉さんを始め多くの支援をしてくれた詩人・批評家・作家の顔や作品の詩的精神が、『コールサック』（石炭袋の歴史を作ってくれたことに深く感謝したい。……）とあった。その九九号に至る歴史に叩頭する思いだ。そんな思いに引きずられながら、浅山泰美の随筆「昭和の頃に見た映画」を読んだ。当時の社会の雰囲気や町の小さな風景が甦ってくる。「赤い蕾と白い花」の主題歌は、吉永小百合が歌ってヒットした。巷間に彼女の愛らしい歌声が流れた。「寒い朝」というタイトルであったと思う。♪北風吹きぬく寒い朝も心ひとつで暖かくなる……この映画や歌のタイトルのように人々がその人なりの夢や希望をはくくめた、そんな時代であった。吉永小百合が七十を超えてなお、元気なことが嬉しい。

『詩的現代』第二次三十号の特集は「鮎川信夫の詩『アメリカ』を読む」である。村嶋正浩、石川敬大、愛敬浩一、川岸則夫、村上芳秀の論考はなかなか読み応えがあった。かつて七十年代前後に現代詩と関わった若者たちの多くは鮎川信夫の詩と向き合わねばならなかったのだから、この特集は多くの読者を

得るであろう。だが、村上は次のようなくだりで彼の論考を閉じる。「鮎川信夫が『アメリカ』で願っていた新しい黄金時代で私は育つたのである。四十三年ほど昔、いっしょに『アメリカ』を読んだ友人の一人は亡くなり、その他の人たちもみんな詩を書いていない。私はたった一人、今も詩を書いている。これからどのような時代が来るのか、私にはわからないが、二〇一九年、現在、生きて再度鮎川信夫の『アメリカ』を読めたことを感謝したい。」しみじみと心に押し寄せるものがある。私も自らの詩の出発点に鮎川信夫と荒川洋治を据える一人だが、後の世代の詩人たちのために、次の言葉を引いておく。鮎川信夫「詩と時代」より。

詩の話というのは神様の話と同じで、一種の信仰告白みたいなもので、誰が話してもそんなものだろうと思うんです。詩はこういうものだと思います。詩はいろいろな角度から喋っても、しよせんはその人自身の詩的信条を告白するだけであって、決して詩そのものの定義にはならない。まして現代みたいな非常にいろいろな詩があつて——種類も多いですし、詩に対する考え方もいろいろ錯綜していますし、そういう点から言っても、詩人自身の一個の信仰告白にならざるをえないだろうと思つているわけです。

一つとして同じ詩はない。故に、自らの詩
をいかに磨くか、その楽しみは深い。